

近畿大学第二外国語科目に関する意識調査報告

第二外国語意識調査チーム¹

1. はじめに

本稿は、近畿大学の第二外国語科目履修者を対象に2018年1月に実施したアンケートの結果を報告するものである。

現在、大学における第二外国語教育を取り巻く環境はますます厳しくなっている。それは、日本の外国語教育において、英語重視の傾向が一層顕著になっているからである。その背景には、冷戦後に始まった世界経済のグローバル化に伴い、急速に増加したヒト・モノ・情報の流通において英語が「国際共通語」という不動の地位を得ていることに起因する。当然のことながら日本の外国語教育は、このような国際情勢の変化の影響を受けており、その結果、社会の一定層に「英語だけでできれば十分」、「外国語といえば英語」という言語観も見受けられる。

中鉢（2004：76、77）はこのような状況を踏まえて、「日本語における英語を中心とする外来語の氾濫は、日本語を歪めるばかりではなく、その背後にある固有の文化を損ねる危険もある」と指摘し、「真の国際人を育てるためには、英語一辺倒では問題があり、英語以外の外国語に触れる機会を与えることが必要」と主張している。

また、堀（2005：24、27）は多言語教育を行う意義について以下のようにまとめている。

- ①英語に伴う文化帝国主義的傾向を抑制する。
- ②英語以外の外国語にもアカデミックな実用性が厳として存在するわけで、研究領域や専攻によっては特定の外国語の習得が不可欠ということになる。当然、大学ならば、できるだけ多くの外国語を学ぶことのできる体制を整えていなければならない。
- ③国際的なセンスを身につけた見識ある市民を育成していく上で、諸言語がそれぞれ有するツールとしての実用的価値と、外国語として等しく孕んでいる他者性の教育的価値を確信する。

なお、政府の教育再生実行会議による第三次提言「これからの大学教育等の在り方について（2013年5月28日）」²において、「1. グローバル化に対応した教育環境づくりを進める」という提言がなされた。「大学は、大学入試や卒業認定における TOEFL 等の外部検定試験の活用、英語による教育プログラム実施等の取組を進め、学生に実践的英語力を

習得させ、海外留学に結び付ける。外部検定試験については、大学や学生の多様性を踏まえて活用するものとする。また、英語力の優秀な学生には更なる語学の習得も重要であり、例えば、東アジアにおけるグローバル化への対応として、実践的中国語等の習得を目指すことなども有用である。」(本文 p.3) という提案が盛り込まれている。後段でも「中国語等の習得」についても触れられているが、その前提として「英語力の優秀な学生には」と述べられており、まずは「英語力」が求められていることが分かる。このように、大学教育において英語教育を重視するという方向性は、依然として揺るぎないように見受けられる。

しかし「言葉」というのは、その言語を使っている社会構成員全体が作り上げてきた歴史は勿論、思想、宗教などの文化の総体である。従って、多様な言語を学習することは、複数の新たな世界観と出会うことを意味する。21世紀のグローバル化時代における英語は、コミュニケーションの道具として有用かつ必須であることは否定できない。しかしながら、「真のグローバル人材育成」のためには、英語教育だけではなく、第二外国語教育が果たすべき役割は大きいと考えられる。

このような考えが、第二外国語を学ぶ学習者にも伝わっているのか、あるいは共有されているのかといった点については、これまでほとんど知ることができなかった。また、学習者がどのようなニーズ・動機によって第二外国語を選択し、そしてその学習において何を求めているのか、従来は担当授業の範囲内で把握するにとどまっていたように見受けられる。

そこで本稿では、近畿大学で第二外国語を学習する学生に直接アンケート調査を行い、第二外国語の学習に関する意識、ニーズ、期待や要望などの把握を試みた。合わせて、選択した言語や所属学部、文系／理系などの別によってどのような傾向が見いだせるか、分析を行った。本稿における調査を通じて、第二外国語を学ぶ学習者の意識・要望に対する理解を深め、今後の第二外国語教育に活かすことのできる有益な情報を見出したい。(睦須賀井)

2. 調査の概要

2.1. 調査対象と方法

本調査は、近畿大学に在学中の学部生を対象に以下の要領で行ったものである。

- ①調査期間：2018年1月10日（水）～2018年1月27日（土）
- ②対象学部：法学部、経営学部、経済学部、文芸学部、総合社会学部、理工学部、建築学部、薬学部、農学部³

- ③対象言語：イタリア語、スペイン語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語
- ④対象科目：総合2（1年次担当）、総合4（2年次担当）、コミュニケーション2（2年次担当）、コミュニケーション4（3年次担当）、カルチャーセミナーB（3年次担当）⁴
- ⑤調査方法：PC・スマートフォンによるアンケート

今回の調査では4,887件の回答があった。このうち、当初調査対象としていなかった短期大学部生からの回答（7件）および科目名が適切に入力されておらず、受講科目が不明な回答（9件）は分析から除外した。よって本稿では4,871件の回答について分析を行う。この数は2018年度の第二外国語履修者の総数（11,687人）の約41.6%に当たる⁵。なお、1人の学生が複数の授業を受講している場合、それぞれの授業でアンケートに回答している可能性があることを断っておく。

2.2. 調査項目

上述したように、本調査ではインターネットを用いて27問の質問について回答してもらったが、質問内容から大きく2つに大別できる。1つは、以下のような回答者の情報に関する質問である。

- 問1 所属学部
- 問2 入学年度
- 問3 この授業の言語名
- 問4 この授業の科目名

もう1つは、（2018年度の）第二外国語の授業を履修している学習者が第二外国語教育についてどのように考えているかを問う質問で、その内容からすると以下のように分けることができる。

まず、下記の間5～問9は、回答者が入学する以前の学習状況を調べるための内容となっている。

①入学以前の学習歴（問5～9）

- 問5 中学・高校では、英語は得意でしたか？
- 問6 大学入学以前に英語以外の言語を学んだことがありますか？
- 問7 その言語は何ですか？（複数回答可）

問8 どのように学習しましたか？

問9 学んだ期間はどれくらいですか？

そして、下記の間10～問19は履修の動機、満足度、学習の意義づけなど、3つのグループに分けられる。

②学習の動機・目的（問10～12）

問10 今受講している第二外国語を決めた動機は何ですか？（複数回答可）

問11 この言語の受講を決めた時の情報源は何ですか？（複数回答可）

問12 現在受講している第二外国語学習の目的は何ですか？（複数回答可）

③学習の満足度（問13～17）

問13 現在履修している第二外国語の授業に満足していますか？

問14（授業に満足している場合）そのように感じる理由は何ですか？（複数回答可）

問15（授業に不満を感じている場合）そのように感じる理由は何ですか？（複数回答可）

問16 英語と比べて、第二外国語の学習は楽しいですか？

問17 英語と比べて、第二外国語の学習は難しいですか？

④学習の実用性、意義づけ（問18・19）

問18 第二外国語の学習は、英語の学習に役立つと思いますか？

問19 大学で第二外国語を学ぶことに意義があると思いますか？

最後に、下記の間20～問27は第二外国語教育に対する回答者の期待と希望に関する質問で構成されている。

⑤学習におけるニーズ（問20～27）

問20 第二外国語の授業で学びたいことは何ですか？3つ程度選んでください。

問21 第二外国語の学習を通して、どのくらいのレベルに到達したいですか？

問22 そのレベルに到達するためには、週に何回の授業が望ましいと思いますか？

問23 来年度も今受講している言語の授業を履修したいと思いますか？

問24 単位や成績と関係なく、これからも第二外国語を履修したいと思いますか？

問25 第二外国語の授業に望むことはなんですか？（複数回答可）

問26 第二外国語に関する検定試験を受検したいと思いますか？

問 27 一クラスの受講者は何人くらいが望ましいと思いますか？（睦）

3. 調査結果と分析

3.1. 回答者の概要（問 1～4）

問 1 所属学部／問 2 入学年度

回答者の所属学部・入学年度別分布は以下の〈表 1〉の通りである。「2013 年度以前」という回答は、ここでは「2013」と略して記した。

学部別では経済学部からの回答が最も多く、次いで総合社会学部（以下「総社」、経営学部、法学部と続いている。また、入学年度別では 2017 年度入学の 1 年生が半数以上を占め、2016 年度入学の 2 年生と合わせて 90% 近くを占めた。

〈表 1〉 回答者の所属学部・入学年度別分布

入学年度	経営	経済	建築	総社	農学	文芸	法学	薬学	理工	総計	年度別%
2013	2	10	1	11	2	6	3	1	1	37	0.8
2014	13	32		12	1	6	7		3	74	1.5
2015	39	100	2	166	1	25	39	2	7	381	7.8
2016	108	574	1	442	3	135	254	7	58	1582	32.5
2017	616	400	110	297	45	361	334	137	497	2797	57.4
総計	778	1116	114	928	52	533	637	147	566	4871	
学部%	16.0	22.9	2.3	19.1	1.1	10.9	13.1	3.0	11.6		

学部ごとに見ると入学年度別の回答者比率はばらつきがあり、経営・建築・農・文芸・薬・理工の各学部では 2017 年度入学生の比率が大きく、経済・総社・法の各学部では 2016 年度入学生も多く回答している。特に経済学部と総合社会学部では、2016 年度入学生の回答数のほうが 2017 年度入学生より多かった。

問 3 この授業の言語名／問 4 この授業の科目名

回答をした授業の言語および科目の分布は、下の〈表 2〉の通りである。「言語」は総計が多い順に、「科目」は履修の進度に沿って並べてある。科目名が「その他」として自由記述されている回答は、まとめて集計した。表中、「コミ」は「コミュニケーション」、

「カルセミ」は「カルチャーセミナー」の略称である。

言語別では、中国語の授業からの回答（1857名、38.1%）が多く、韓国語（24.8%）、ドイツ語（18.7%）と続く。

また、科目別では、問2の入学年度で2017年度入学生（1年生）が多かったことから推測されるように、通常1年生が後期に受講する科目である「総合2」の回答者が約67%と、最も多くを占めている。2年生に担当されている科目の「総合4」、「コミュニケーション2」はそれぞれ約18.1%、10.5%となっている。

〈表2〉回答者の履修言語・科目別分布

科目 言語	総合 2	総合 4	コ ミ 2	コ ミ 4	カ ル セ ミ B	そ の 他	総 計	言 語 別 %
中国語	1091	399	256	54	39	18	1857	38.1
韓国語	925	166	85	27	2	5	1210	24.8
ドイツ語	630	156	88	11	25	2	912	18.7
フランス語	335	114	52	14	19	6	540	11.1
スペイン語	213	36	16	3			268	5.5
イタリア語	60	11	13				84	1.7
総計	3254	882	510	109	85	31	4871	
科目別%	66.8	18.1	10.5	2.2	1.7	0.6		

なお、問1から、農学部の回答は全体の1.1%であり、データ分析の過程で同学部の回答者は韓国語の受講生に限られていることがわかった。そのため、断りのない限り、以下の記述では農学部の回答については言及しない。（須賀井）

3.2. 入学以前の学習歴（問5～9）

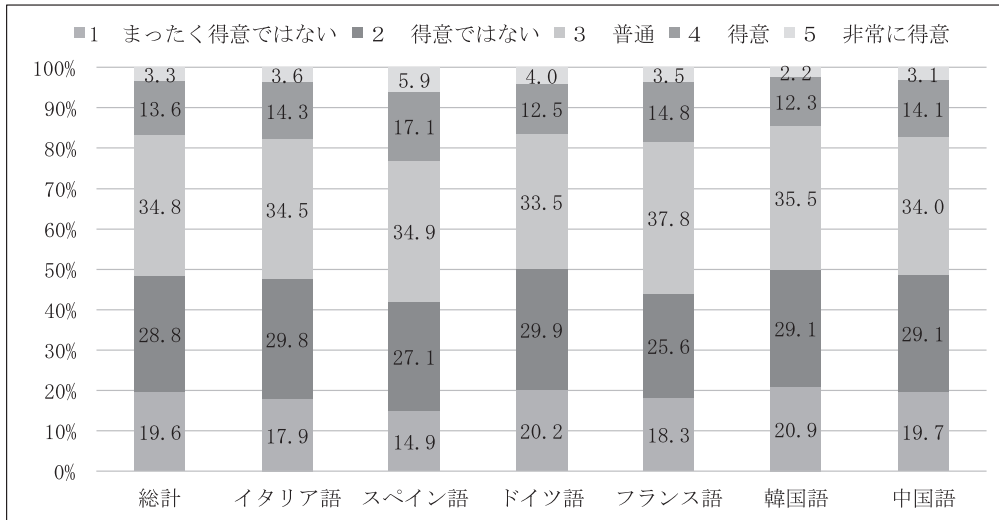
問5 中学・高校では、英語は得意だったのか

入学前の外国語学習歴について問うたが、問う前に、英語の得意、不得意について尋ねた。下記の〈図1〉を見てもらいたい。

〈図1〉は、左に回答者4871名全体の結果（＝「総計」）を、そしてその左には言語別の結果を示したものである。英語が得意であったのかについて、いずれの言語でも「非常に得意」「得意」を合わせて20%前後であり、欧米の言語とアジア系言語との間でも大き

な差が見られない。さらに「普通」まで含めると、スペイン語とフランス語とでやや比率が高いが、全体として「まったく得意ではない (19.6%)」「得意ではない (28.8%)」で半数近くを占めていることが分かる。(第2外国語選択と英語との関連性について一言、スペイン語は「非常に得意 (5.9%)」、「得意が17.1%」は、得意が20%、しかし他の言語は20%未満)

〈図1〉 中学・高校では、英語は得意だったのか



問6 大学入学以前に英語以外の言語を学んだことがあるか

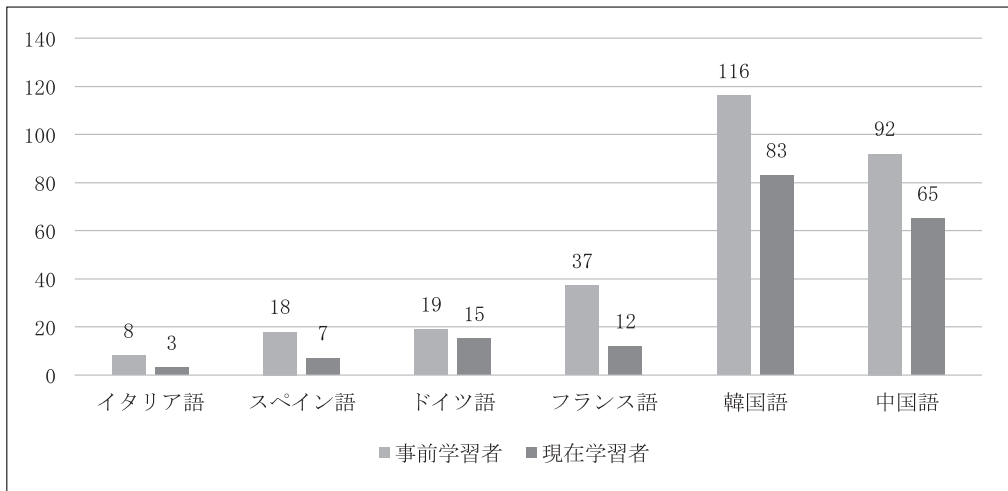
入学前の外国語学習経験について尋ねたところ、学んだことが「ある」という回答が346件(7.1%)、「ない」が4525件(92.9%)で、ほとんどの受講者が、大学入学前に英語以外の言語を学んだことがなかった。このことは、多くの受講者が大学に入って初めて英語以外の言語を学ぶということを意味している。言い換えると、第二外国語の科目を開設している高校がそれほど多くなく、また科目を開設されていても十分に学習時間が確保されていないため文化中心の教育になっていることを意味する⁶。

問7 その言語は何か

入学前の外国語学習経験が「ある」346件の内容を確認する(下記の〈図2〉参照)と、フランス語(37名)、ドイツ語(19名)、スペイン語(18名)、イタリア語(8名)といったヨーロッパ言語に比べて、圧倒的に韓国語(116名)と中国語(92名)が多い。少数ながらも、ロシア語、タイ語、フィンランド語など、第二外国語として開講されていない言語を独習している学生もいたことが分かった⁷。

そして、中学・高校で英語以外の言語を学んだことがある事前学習者（346名）と現在第二外国語を履修している学習者（185人）についても調べた。その結果が下記の〈図2〉である。上記の間6で確認したように高校で第二外国語を学習した回答者はかなり少なく（7.1%）、また高校で学習していても大学で続けて学習する回答者は53.3%で、それほど持続性があるとは言えない。また、〈図2〉で示した通り、イタリア語、スペイン語、フランス語は半分以下であるのに対し、ドイツ語、韓国語、中国語は継続して学習している割合が高いと言える。

〈図2〉 中学・高校での事前学習者と現在の学習者数



問8 どのように学習したのか

全言語での統計は、「学校」が62.9%、「独学」が25%、「家庭」が12.1%となっている。言語別に見ると、韓国語の独学の割合が37.6%と、他の言語と比べ、独学の割合が高くなっている。このことから、アイドルやファッションなど、韓国文化への関心の高さや、韓国文化に触れあう機会が多い、大阪という場も関係していると考えられることでもできそうである。

問9 学んだ期間はどれくらいなのか

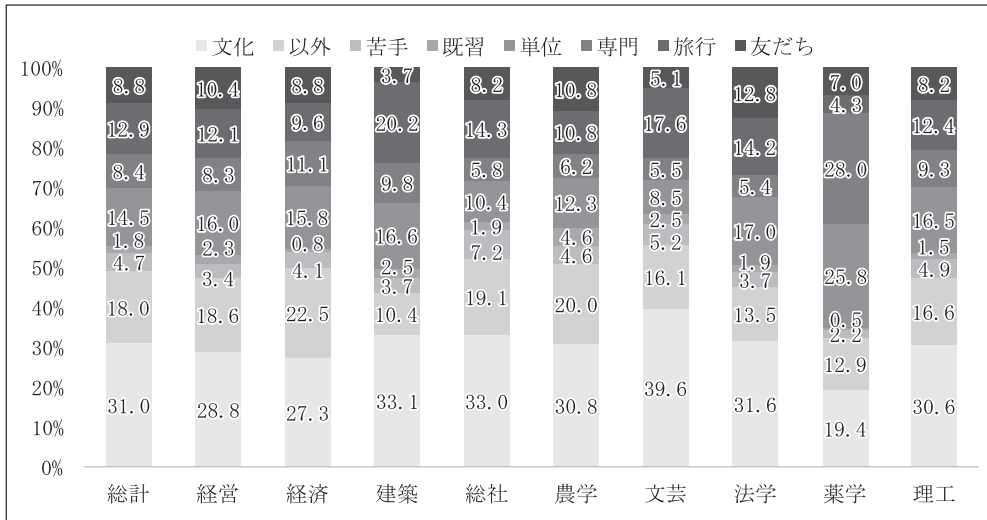
大学入学以前の学習期間は学部によって大きな違いはない。全体的な結果としては、6ヶ月未満が34.1%と最も多く、1年未満が23.7%であった。しかしながら、1年以上2年未満が21.7%、2年以上が20.5%と、1年以上継続して学習している学生が全体の4割に達している。この結果から、英語以外の言語の授業プログラムが充実している高校が存在するのではないかと推測される。

言語別に見てみると、2年以上続けて学習していると答えた学生が、韓国語では23.2%、中国語は21.3%、ドイツ語26.8%、それぞれ2割以上いた。

3.3. 学習の動機・目的 (問 10～12)

問 10 今受講している第二外国語を決めた動機は何か

〈図 3〉 今受講している第二外国語を決めた動機は何か



複数回答が可能のため、延べ人数（6307名）となっている。まず、総計（上記の〈図 3〉の左にある総計）をみると、「その言語圏のことばや文化に関心があったので（以下「文化」）」という項目が最も高く31%、「英語以外の外国語も必要だと思ったので（以下「以外」）」は18%である。「英語が苦手なので（以下「苦手」）」4.7%という回答と比べると、多くの学生が積極的な理由で第二外国語の受講を決定したことが分かる。しかしながら数は多くないものの、「単位を取りやすいと聞いたので（以下「単位」）」という回答も14.5%あった。

学部別（上記の〈図 3〉参照）にみると、「文化」ということで受講を決定した学生が多いのは文芸学部であり、39.6%である。また薬学部にも特徴があり、「専門科目の勉強に役立つと思ったので（以下「専門」）」という回答が28%と他の学部と比較すると突出している。

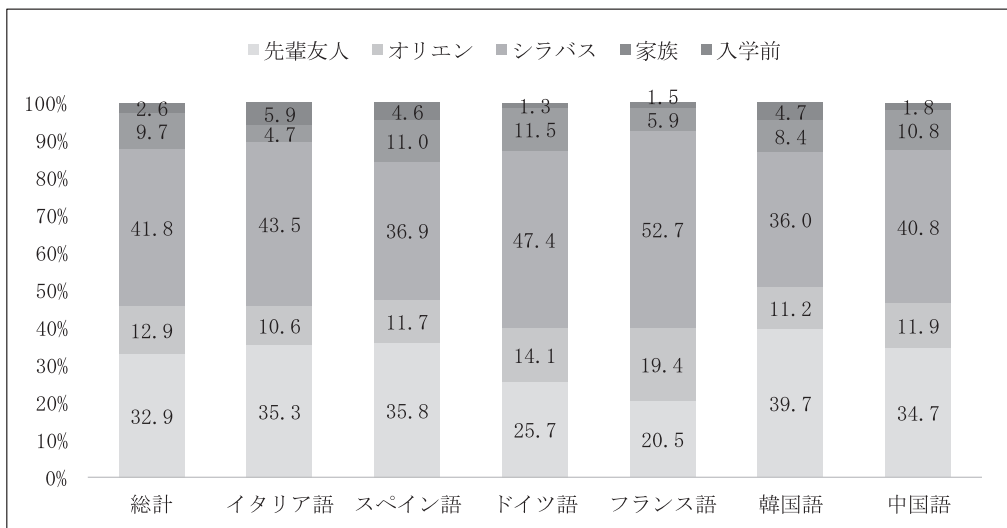
言語別にみた動機の違いで注目すべき点は、「その言語圏に旅行したいので（以下「旅行」）」という項目である。比率が一番低い中国語が4.2%であるのに対し、イタリア語が29.3%と大きな違いが現れた。観光大国としてのイメージが言語履修に際し、大きな影

響を与えていることが分かる。「単位」を選んだ学生を抽出すると、はっきりとした言語ごとの違いがあらわれた。中国語（18.6%）が多く、次に韓国語（16.7%）とスペイン語（13.5%）が続く。ドイツ語（8%）とフランス語（7.1%）は同じヨーロッパ言語であるイタリア語やスペイン語と比べると、単位が取りやすいとは考えられていない。「単位が取りやすい」と考えられる原因が、楽をして単位を取ることができると考えられているのか、あるいは発音や筆記などの面で、日本語と近く、親しみやすいイメージをその言語に持っているのか、詳細にみていく必要もあるだろう。第二外国語を履修する動機として、「英語が苦手だから」という理由と言語の選択に相関はあるのかどうか、言語別のデータを検討してみた。その結果、問5の「中高では英語は得意だったか」という質問も参照してみたものの、英語が苦手な学生が特定の言語を選択しているという傾向はほとんど見られなかった。確かに、英語が苦手な学生が中国語を選んでいる学生は10.8%で、ドイツ語の7.2%、フランス語の5.4%と比べれば多いものの、飛び抜けて大きな差があるというほどではなく、母集団の人数の差があるために生じた違いであると考えられる。

問 11 この言語の受講を決めた時の情報源は何か

全体（下記の〈図4〉の総計）で見ると、「シラバスを読んで」（以下「シラバス」、41.8%）が多く占め、次に「先輩や友人、高校の先生からのアドバイス」（同「先輩友人」、32.9%）からの情報で言語を選択していることが分かった。

〈図4〉 この言語の受講を決めた時の情報源は何か

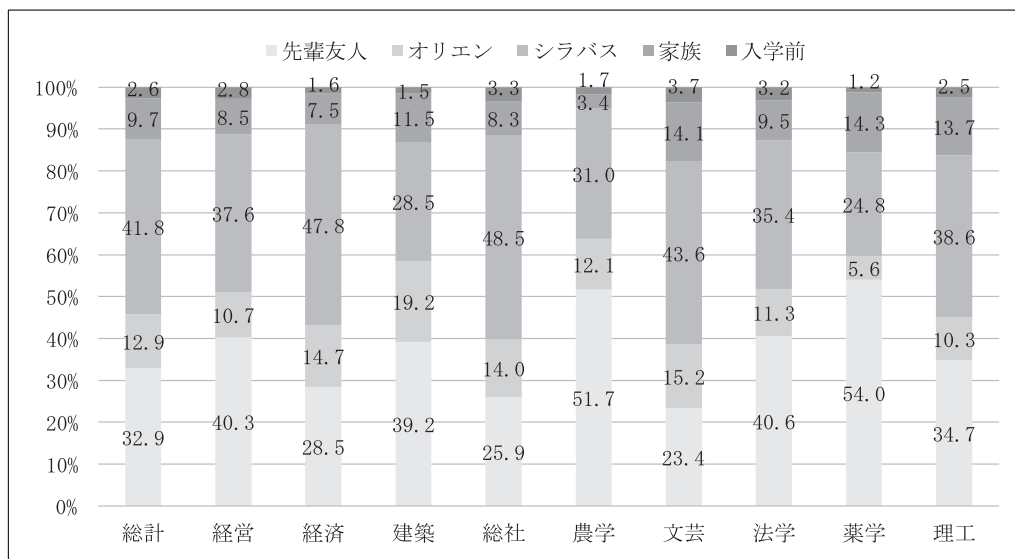


言語別に比較すると、フランス語（52.7%）やドイツ語（47.4%）が「シラバス」を

参考にしているのに対し、中国語（34.7%）、韓国語（39.7%）、スペイン語（35.8%）は「先輩友人」からの情報を参考としていることが分かる。韓国語では「先輩友人」を情報源とする回答者（39.7%）が、「シラバス」を選んだ回答者（36%）よりも上回っているのが特徴的である。また少数ではあるが、韓国語では4.7%が「大学入学前に学んでいたの」を挙げている。ドイツ語では「家族からのアドバイス（同「家族」）」を情報源とする回答が11.5%に上り、5.9%のフランス語や4.7%のイタリア語を大きく引き離している。おそらく回答者の両親の世代においては、第二外国語としてのドイツ語が今より一般的であったことと関係しているのではないかと考えられる。

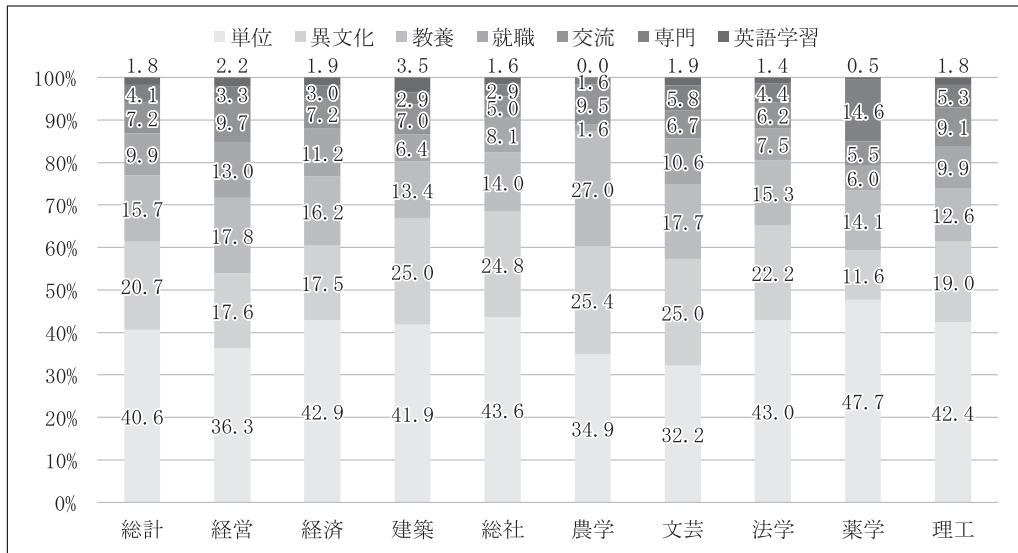
学部ごとに選択に関わる情報源を比較すると（図5）、理系学部（薬学部54%、農学部51.7%、理工学部34.7%、建築学部39.2%）の学生が「先輩友人」を情報源としている。半数以上が「先輩友人」を情報源とした薬学部や農学部に対し、文芸学部はその割合が半分以下に減って23.4%となっており、主にシラバス（43.6%）を参照して、履修言語を決定していることが分かる。（徳永 熊谷）

〈図5〉 この言語の受講を決めた時の情報源は何か



問 12 現在受講している第二外国語学習の目的は何か

〈図 6〉 現在受講している第二外国語学習の目的は何か



全体（〈図 6〉の総計）では「単位を取得するため」（以下「単位」）が 40.6% で最も多く、次いで多かったのは「異文化理解のため」（同「異文化」、20.7%）、「教養を身につけるため」（同「教養」、15.7%）、「将来就職に役立てるため」（同「就職」、9.9%）であった。「単位」が最も多かったのは、大部分の学部で外国語の単位修得が卒業要件となっているからであろう。また、回答を内容に即して分類すると、「異文化」や「教養」、「外国人と交流するため」（同「交流」、7.2%）、「専門科目の勉強に役立てるため」（同「専門」、4.1%）、「英語の学習に役立てるため」（同「英語学習」、1.8%）といった学びやコミュニケーションを目的とする回答の合計が約 50.0%、「単位」や「就職」といった進級や将来の進路を目的とする回答の合計も約 50.0% となった。

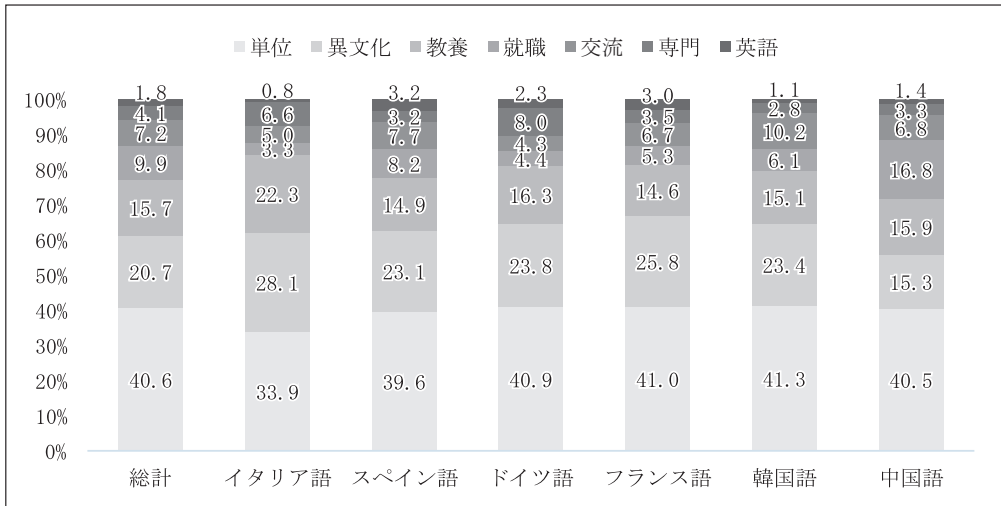
このほか、学部別や言語別の回答内容の割合にも一定の傾向が見られた。

学部別では、薬学部は「単位」の割合が約 47.7% に達し、他学部と比べて特に多いと同時に、「専門」の割合も多く、15% 近くを占めた。また、全体に「単位」の割合が 4 割以上を占めるなか、この割合が 36.3% と 4 割を下回った経営学部では、「就職」（13.0%）や「交流」（9.7%）の割合が相対的に高く、同様に「単位」の割合が 32.2% と少なかった文芸学部では、「異文化」（25.0%）や「教養」（17.7%）の割合が高かった。

言語別（下記の〈図 7〉参照）では、「単位」に次いで多かった回答が、中国語とこれ以外の言語で異なった。中国語以外の言語では、「単位」に次いで多かった回答が「異文化」、「教養」であり、両者の合計が 4 割程度を占めた。一部の学部で開講されているイタ

リア語はこの両者の割合が特に高く、前者は28.1%、後者は22.3%を占めた。これに対して、中国語は「異文化」15.3%、「教養」15.9%と両者を合計しても3割程度であり、一方で「就職」が他言語と比べて多く16.8%を占めた。中国語に見られる回答傾向は、昨今の経済情勢やインバウンド需要等の影響に起因すると考えられる。

〈図7〉 現在受講している第二外国語学習の目的は何か



3.4. 学習の満足度 (問 13～17)

問 13 現在履修している第二外国語の授業に満足しているか

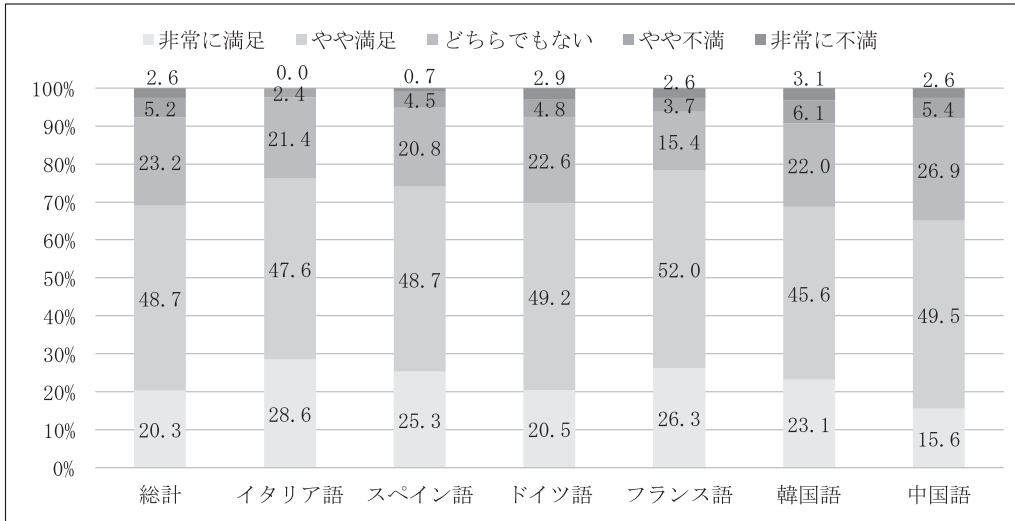
全体（下記〈図8〉の総計）では、「非常に満足している（20.3%）」と「満足している（48.7%）」の合計は69.0%となり、約7割の学生が第二外国語の授業に満足していた。一方、積極的な不満を示す「やや不満である（5.2%）」と「非常に不満である（2.6%）」の合計は約8%であり、1割近くに達した。第二外国語の履修者は概ね授業に満足しているが、不満を抱く学生も一定数存在することが明らかとなった。

不満を示す回答は、薬学部で顕著であった。薬学部は他学部に比べて満足度が低く、「非常に満足している」や「満足している」の合計が63.9%であり、全体の平均より5ポイント低かった。この分、「やや不満」や「非常に不満」が多く、約18%の学生が不満を示した。

また、満足度は言語によって顕著な差が見られた。満足度が最も高いフランス語では78.3%、最も低い中国語では65.1%となった。おおよそ、フランス語、イタリア語、スペイン語では満足度が高く、中国語、韓国語、ドイツ語では相対的に低かった。満足度の低い言語は満足度の高い言語に比べて履修者数が多い傾向がある。これらの言語はクラス数

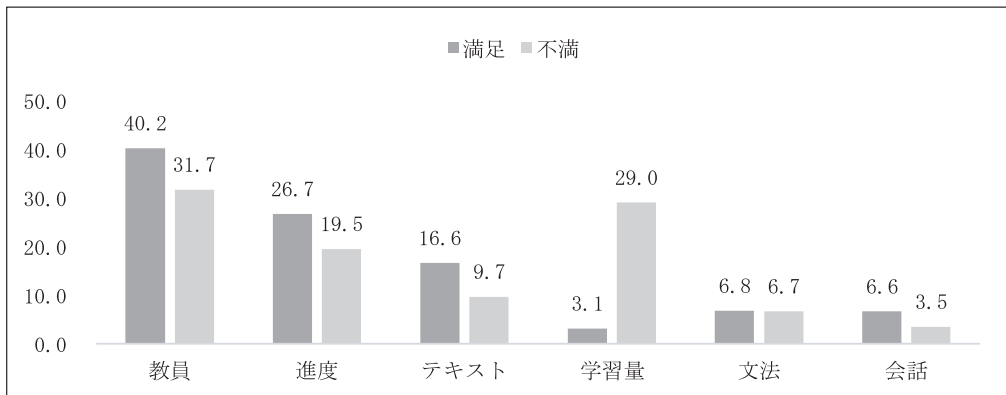
が多い分、担当者によって授業の内容や質に差があり、この点が結果に反映している可能性がある。同様の傾向は、以下の設問 14、設問 15 でも見られた。

〈図 8〉 現在履修している第二外国語の授業に満足しているか



問 14 授業に満足している場合、そのように感じる理由は何か

〈図 9〉 授業に満足 / 不満を感じている場合、そのように感じる理由は何か



上記の〈図 9〉は授業に満足または不満を感じた理由を表しており、左が満足の理由、右が不満を示している。まず、満足と回答した理由は、「教員の教え方」（以下「教員」）が 40.2%で最も多く、「授業の進度」（同「進度」）が 26.7%でこれに次いだ。このように、半数以上の学生は授業の担当者や進行に満足していることが明らかとなった。ただし、「教員」については言語によって顕著な差があった。満足との回答が最も多かったフラン

ス語は78.3%、最も少なかった中国語は65.1%となった。クラス数の多い中国語と韓国語で特に「教員」の満足度が低かったことから、両言語では授業内容や学生への対応等、担当教員による差が大きいことがアンケート結果に反映した可能性がある。

問 15 授業に不満を感じている場合、そのように感じる理由は何か

上記〈図9〉において不満を感じる理由は、多い順に「教員」(31.7%)、「学習量が多い」(同「学習量」、29.0%)、「進度」(19.5%)であった。これらの回答数の割合は言語によってやや異なり、ドイツ語と韓国語では「教員」が多く、中国語では「学習量」が多かった。また、フランス語では「テキストの内容」(同「テキスト」)と回答した割合が他の言語よりも高かった。これらの結果は、言語ごとに改善の余地がある問題を示している。

また、満足と不満の理由を比較した場合、「文法中心の授業(同「文法」)」は満足と不満の回答がほぼ同数となり、他は概ね満足が不満を上回った。ただし、「学習量」は不満(29.0%)の回答が満足(3.1%)を大幅に上回っていた。なぜ学生が学習量に不満を感じるのか、現時点では明らかではない。今後、その原因を究明するとともに、学習量を負担と感じさせない授業内容の工夫等を考えていくことが必要となるだろう。

問 16 英語と比べて、第二外国語の学習は楽しいか

全体では「楽しい」が45.9%であり、半数近くを占めた。一方、「どちらでもない」と「楽しくない」の合計は約54.0%であり、半数以上が第二外国語の授業を必ずしも楽しんでいないことが明らかとなった。

学部別に見ると、総合社会学部では「楽しい」が51.4%と5割を超えたのに対して、他の学部では5割に満たず、少ないところでは薬学部が38.8%、経済学部41.6%となった。また、明確に「楽しくない」と回答した割合は薬学部の19.7%が最も高く、これに次いで高かったのは経済(17.2%)と経営(16.8%)であった。このように、「楽しい」は総合社会学部が、「楽しくない」は薬学部が特徴的な傾向を示した。

言語別に見ると、母数の少ないイタリア語で「楽しい」が56.0%であったのを除き、フランス語が54.8%と高く、韓国語も52.2%と5割を超えた。一方、ドイツ語は44.8%、スペイン語は44.2%、中国語は39.5%であり、フランス語と比べて10～15パーセント程度低かった。

問 17 英語と比べて、第二外国語の学習は難しいか

全体では、「難しい」が53.2%、「どちらでもない(26.2%)」と「楽しくない(20.6%)」

の合計が約 47.0%と、わずかながら英語に比べて第二外国語のほうが難しいと感じる学生が多いことが明らかとなった。この結果は、第二外国語は大部分の学生にとって大学で初めて学習する言語であることに起因すると考えられる。

学部別に見ると、「難しい」と回答した割合は薬学部が 62.6%と最も高いが、他学部はいずれも 5 割から 5 割強の割合であった。一方、「難しくない」と回答した割合を見ると、文芸学部が 17.9%、薬学部が 17.0%となっているほかは、どの学部も概ね 2 割から 2 割強程度であった。このように「難しい」と「難しくない」という回答は、薬学部を除き、学部間でそれほど大きな差はなかった。薬学部で「難しい」の回答が突出している原因については、他学部と異なり、薬学部の第二外国語科目に韓国語がなく、ドイツ語・フランス語・中国語の三言語が開講している状況が影響しているかもしれない。

言語別では、母数の少ないイタリア・スペイン両言語を除き、「難しい」と回答した割合はドイツ語が 68.5%、フランス語が 61.7%と西洋言語が 6 割を超えた。一方、東洋言語の韓国語は 46.7%、中国語は 45.7%と半分に満たなかった。この結果は、西洋言語と東洋言語の特質と、日本語を母語とする学習者にとっての学習難易度の差が影響していると考えられる。

3.5. 学習の実用性、意義づけ (問 18・19)

問 18 第二外国語の学習は、英語の学習に役立つと思うか

全体では「非常にそう思う (8.0%)」と「そう思う (23.8%)」の合計が約 32%、「あまり思わない (29.3%)」と「まったく思わない (8.5%)」の合計が約 38%となった。少なくとも、第二外国語が英語学習に役立つと考えている学生のほうが、やや少ない結果となった。

学部別では回答の割合に差があった。「非常にそう思う」や「そう思う」と回答した割合は、文芸学部では 40.8%、経済学部では 40.4%と 4 割を超えたが、他の大部分の学部では 4 割に満たず、特に薬学部では 26.5%と顕著に低かった。また、「あまり思わない」や「まったく思わない」と否定的な回答をした割合は、薬学部が 45.6%であったのを筆頭として、概ね 3 割から 3 割強程度であり、3 割より少なかったのは文芸学部 (28.0%) と経済学部 (27.9%) の二学部であった。この点は、薬学部全体のカリキュラムの専門性が他学部と比べて高いなど、学部間の専門性の違いが影響していると推測される。

言語別では、「非常にそう思う」と「そう思う」の割合が西洋言語では高く、母数の少ないイタリア語とスペイン語を除き、フランス語では 46.9%、ドイツ語では 41.4%となった。一方、東洋言語では相対的に低く、中国語では 36.9%、韓国語では 30.5%となった。この結果は先の設問 17 と同じく、言語間の特質が関係していると推測される。(中野 原田)

問 19 大学で第二外国語を学ぶことに意義があるか

回答者の 4871 名中 3417 名、即ち 7 割以上の学習者が「非常にそう思う (20.6%)」「そう思う (49.6%)」を選んでいる。その一方で薬学部・建築学部・理工学部では「あまり思わない」「まったく思わない」の割合が相対的に高い。

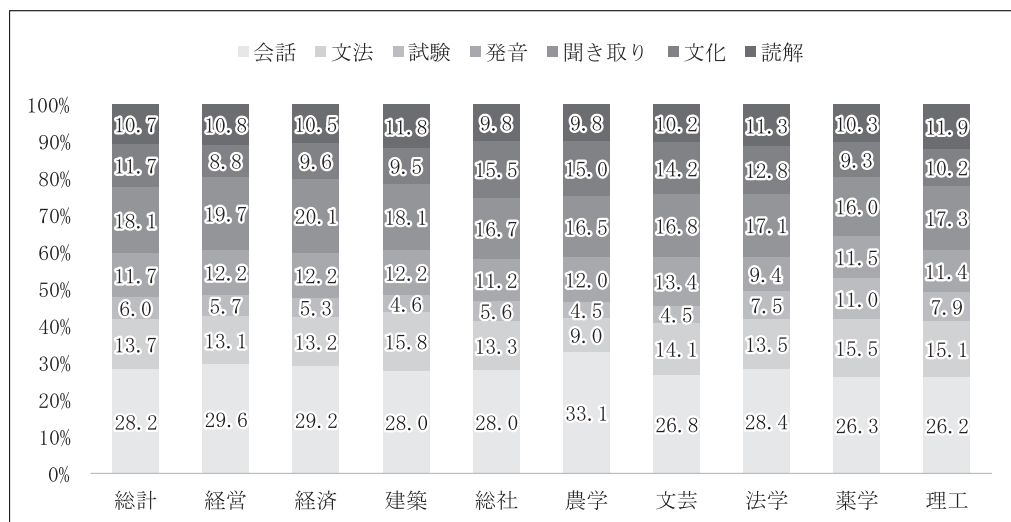
学ぶ意義がある言語として、スペイン語とイタリア語が高い割合を占めているが、この二言語は開講学部が限られている。スペイン語・イタリア語を学ぶことができる学部の一つが法学部であり、両言語のポジティブな回答が関係しているためか、学ぶ意義を感じる学生が多いという結果が得られている。

3.6. 学習におけるニーズ (問 20 ~ 27)

問 20 第二外国語の授業でもっとも学びたいことは何か

この設問も複数回答が可能のため、延べ人数 (13,490 名) となっているが、「会話」が全体的に高い割合 (28.2%) を示している。しかし、オーラルに関する「聞き取り」「発音」も高く、「文法」の割合と拮抗していることがうかがえる。

〈図 10〉 第二外国語の授業でもっとも学びたいことは何か



上記の〈図 10〉の通り、文芸学部 (14.2%)・総合社会学部 (15.5%) では「文化」への関心も高い。経営学部・経済学部や、理系学部 (建築・薬学・理工) では、「文化」よりも「読解」の割合が高い。

言語別で見ると、ヨーロッパ系言語で「文化」の割合が高く、アジア系言語で「聞き取り」の割合が高いことがわかる。

問 21 第二外国語の学習をつうじて、どれくらいのレベルに到達したいか

「旅行で困らない程度」がもっとも高く、全体の 67.5%を占めており、次に「日常生活で困らない程度」（以下「日常生活」、(22.4%))となっている。これらの質問は回答者によってイメージが異なるが、仮に定型表現を暗記して挨拶や買い物を行うレベルが想定されているとすれば、平易な会話に関心が向かっていると見なすこともできる。これは初学者の目標設定としては妥当なものかもしれないが、他方で経営学部・経済学部・法学部での「ビジネスなどで使える程度」（同「ビジネス」）の高さ、薬学部・理工学部での「研究などの専門的分野で使える程度」の高さは、学部によるニーズに差異を示していると考えられる。

言語別で見ると、「日常生活」の割合の高い言語は中国語（40.2%）、韓国語（29.8%）のアジア系言語で、約 3 割で相対的に高い。他方、ヨーロッパ言語のドイツ語（12.2%）、フランス語（10.3%）、スペイン語（5.7%）、イタリア語（1.7%）は 15%未満にとどまっている。そして、「ビジネス」においては、基本的には 10%前後であるのに対して中国語だけが 54.5%を突出している点が興味深い。

問 22 そのレベルに到達するために週何回の授業が望ましいか

現状の「週 1 回」が 41.2%、「週 2 回」が 41.6%、「週 3 回」が 11.1%、そして「週 4 回以上」が 6.2%となっている。この設問、特に「週 1 回」の回答において、文系学部と理系学部において大きく異なっている。まず、法学部が 45.5%、文芸学部が 41.5%、総合社会学部が 33%が「週 1 回」の授業を望んでいるが、薬学部 66.7%、理工学部 54.2%など理系各部では 5 割以上が「週 1 回」の授業を希望していることが分かる。そして「週 2 回」の授業については、総合社会学部（51.0%）・建築学部（45.6%）・経済学部（43.8%）・経営学部（42.2%）が 4 割以上を希望している。

言語別で見るとドイツ語（45.7%）とイタリア語（45.2%）の「週 1 回」の割合が高い。ドイツ語に関しては薬学部の受講者が多く、イタリア語は法学部で開講されている科目であるため、その影響を受けたのではないだろうか。

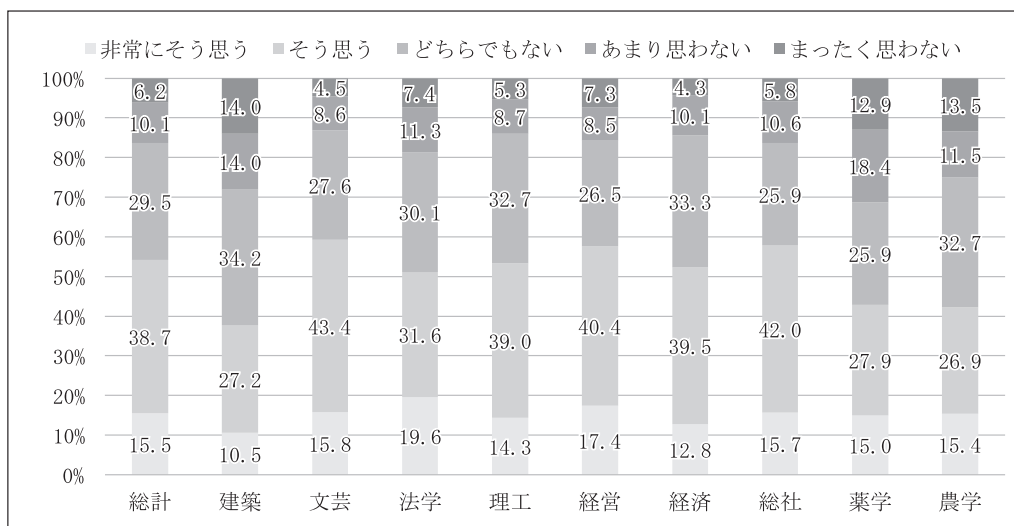
問 23 来年度も今受講している言語の履修をしたいと思うか

全体では「非常にそう思う（15.5%）」「そう思う（38.7%）」が約 54%を占めている。その中で薬学部と建築学部は「あまり思わない（18.4%・14.0%）」「まったく思わない（12.9%・14.0%）」の割合が高い。薬学部・建築学部ともに総合 3～4 の設置がないため、ポジティブな回答が不可能だったことが推察できる。他方で文系学部では法学部において否定的な意見が目立つが、調査実施当時の再履修クラスの受講者が多いこと、すなわ

ち2年次で別言語に変える風潮が強かったことと関連しているのではないかと

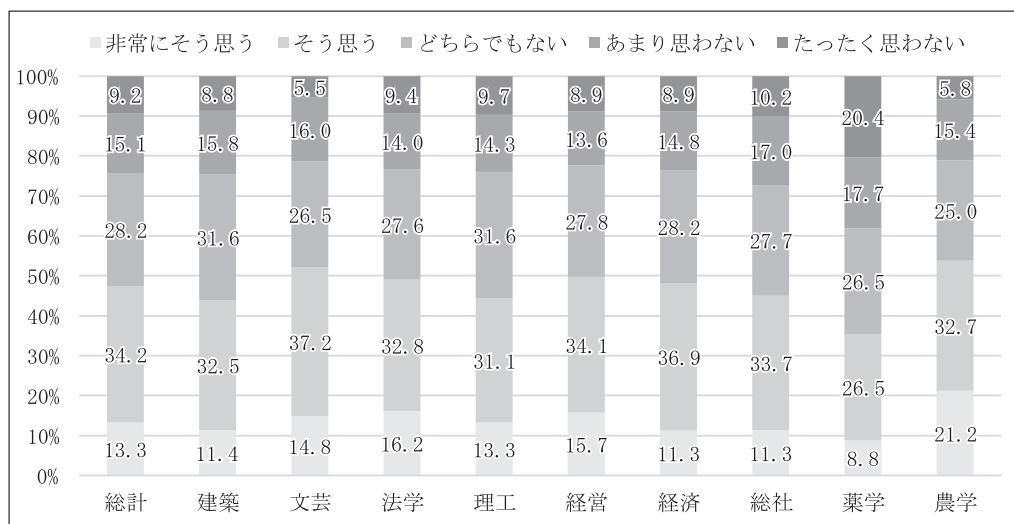
言語別でドイツ語と中国語に否定的な意見が目立つのは薬学部の開講科目であることと関連しているだろう。他方、イタリア語とスペイン語は共に法学部で開講されている言語であるため、相関関係にある可能性が高い。

〈図 11〉 来年度も今受講している言語の履修をしたいと思うか



問 24 単位や成績と関係なく、これからも第二外国語を履修したいか

〈図 12〉 単位や成績と関係なく、これからも第二外国語を履修したいか



全体で 47.5%が今後も履修したいと思っているのに対して 24.3%が否定的に答えてい

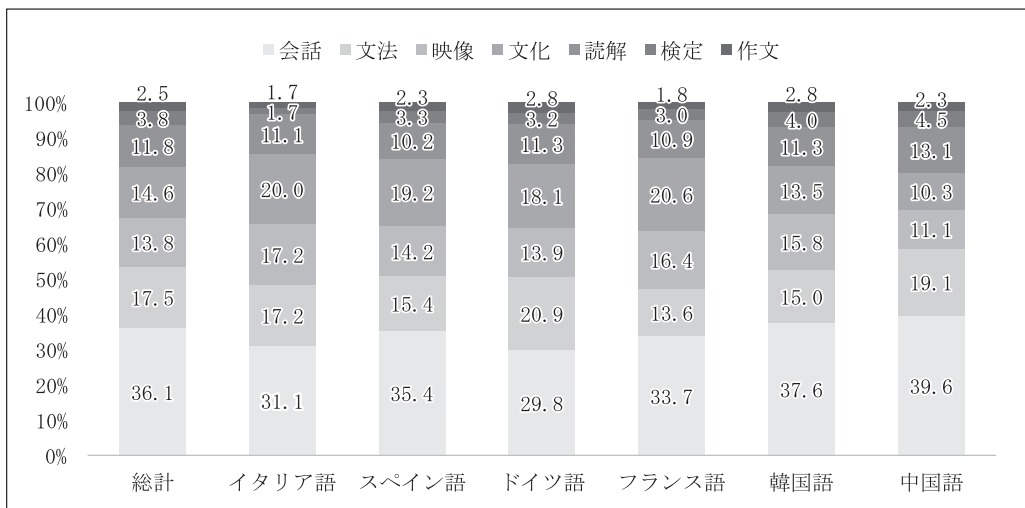
る。特に、否定的な意見は薬学部が38.1%で多い。一方、文芸学部（52.0%）・農学部（53.9%）は単位と関係なく履修したいという学生が5割を超える。

言語別で見ると、イタリア語・スペイン語・フランス語など、履修者が少数の言語において履修希望の割合が若干高い。他方、ドイツ語と中国語に否定的な意見が見られるのは薬学部の影響を受けていると思われる。

問 25 第二外国語の授業に望むことは何か

問 25 も複数回答可能な設問で、8367 件の回答があった。

〈図 13〉 第二外国語の授業に望むことは何か



上記の〈図 13〉（左の総計）で示したように、「会話中心の授業」（以下「会話」）が36.1%、そして「文法中心の授業」（同「文法」）が17.5%、「映像を使った授業」（同「映像」）が13.8%である。結果から、映像教材の授業を望む声はさほど多くないため、ネイティブの会話の映像テキストなどをイメージした回答ではないことが推察できる。また、会話の割合に合わせて「文法（17.5%）」や「その言語圏の文化や歴史、時事などの紹介」（同「文化」14.6%）への関心が比較的高い。会話中心の授業スタイルでありながら、「文法」「文化」に関心を向けていることの意味を考えると、学生が求めている授業は要するに教師や他の学生とのインタラクションであり、「会話」は目的ではなく、学習の手段であるのではないだろうか。すなわち学生は一对多の座学ではなく、実践の中で言語・文化の知識を獲得することを希望している可能性がある。ただし、薬学部は「文化」が9.8%で唯一10%以下を示した。それに対して、理工学部は「文化（10.7%）」への関心はさほ

ど低くないが、「読解中心の授業」(同「読解」)の割合が他学部と比べて最も高い14.4%となった。このことから薬学部・理工学部ではインタラクションよりも個人として思考を深める学習を希望する学生が相対的に高い割合にあると考えることができるだろう。

言語別(上記の〈図13〉参照)でも「会話」の優位は変わらないが、アジア系言語の「会話」の割合が比較的高く、他方で「文化」への関心がヨーロッパ系言語と比較して低い。

問26 第二外国語に関する検定試験を受けたいと思うか

「検定試験を受験したいと思うか」という問いに関しては76.5%が「いいえ」という回答をしている。それでも23.5%が検定試験を受けたいと思っている点は無視できないのではない。検定試験を受けたいという回答は韓国語が最も高い26.4%で、次いでフランス語(24.6%)、中国語(23.3%)、スペイン語(23.0%)、ドイツ語(20.4%)、そしてイタリア語がもっと低い14.3%である。多くの言語が検定を積極的に宣伝してはいない状況でこれほどの「潜在的受験希望者」を抱えているとなると、検定試験が身近なものになった場合、希望者数の大幅増加も見込めるだろう。

問27 一クラスの受講者は何人くらいが望ましいか

回答者が最も望んでいる一クラスの人数は「20名程度」で36.6%となっている。しかし、法学部では「15名程度(33.4%)」のクラスが最も高く、また薬学部では23.1%の回答者が「30人程度」のクラスを望んでおり、他学部とは大きく異なっている。それは薬学部の履修者が多い中国語・ドイツ語の言語別の結果に影響を与えているようだ。(有馬高橋)

4. おわりに

ここまで、本学の第二外国語履修者に対する意識調査の結果を整理してきた。この調査は、大学をはじめ、日本の外国語教育において英語教育を重視するという傾向が強まっている中で、当事者である学習者はどのような意識を持っているのか、その実態を把握すべく、実施したものである。全ての第二外国語科目履修者が対象ではないものの、4800を超える回答があり、履修者の傾向をつかむことができたと考えられる。本調査の分析結果を簡単にまとめれば以下の通りである。

全体として、その言語圏のことばや文化に興味があり、英語以外の言語も必要だと考えて第二外国語科目および言語を選択する傾向が見られ(問10)、英語以外の言語を大学に入って初めて学ぶ学習者として、選択した言語の学習に積極的な意欲を持っていることが

分かる。この点では、大学など教育機関では英語教育を重視するという流れの中においても、学習者自身は英語のみでよいと考えているわけではなく、第二外国語の教員・受講生との間で方向性が一致すると言えよう。また、一部の学部では専門科目の勉強に役に立つと考えている回答もあり、学部ごとに多少異なる動機づけが見られた（問12）。実際には単位取得が学習の主たる目的であるが、言語によっては「就職」、学部によっては「専門科目の助け」を目的としているなど、こちらも多様であった（問12）。

第二外国語の学習については、概ね満足しているものと見られる（問13）。満足・不満足の内いずれもその理由としてトップに挙げられたのが「教員の教え方」であったことは興味深い（問14）。「学習の進度」も同様で、満足・不満足を問わず理由の上位に挙げられている。担当する教員や授業の進度が、履修者により異なった評価がされていることが考えられる。

第二外国語を学ぶ意義については、7割が「意義がある」と答えているが、薬学部・建築学部・理工学部といった理系学部では「意義がない」と考えている履修者も多くいることが分かった（問19）。

学習におけるニーズとしては、全体を通じて会話を学びたいという傾向が見られたが、文芸学部や総合社会学部では文化への関心も高く、経営学部や経済学部、理系の学部では読解を希望する声も多いなど、学部によりやや異なる傾向がみられた（問20）。ヨーロッパ系言語では文化を選好するなどといったことも分かった（問21）。レベルは旅行で困らない程度であればよいとする回答が多く（問21）、そのための授業回数は現状の週1回、多くて週2回でよいと考えているようである（問22）。

今後も学習を継続するかについては、さほど積極的ではないようである。次年度も同じ言語を受講したいと考える履修者が半数ほどで（問23）、単位や成績と関係なく今後も学習したいと考える履修者は半数に満たない（問24）。学習の目的を単位の取得と考えている履修者が多いこととも連動していると思受けられる。

検定試験の受検には関心があまり高くなかったが、それでも約24%が受検したいと回答した。特に中国語で受検希望が多いようである。

以上のように、第二外国語履修者の意識について、全体的な傾向とともに、各学部・言語で特徴的に見られる傾向もあることが分かった。今後、第二外国語の授業において参考とすべき情報も多く含まれている。

なお、今回の調査では学年別（入学年度別）、科目別の傾向を詳細に検討することができなかった。今後の課題としたい。（須賀井）

- 1 有馬麻理亜（フランス語）、熊谷哲哉（ドイツ語）、須賀井義教（韓国語）、高橋梓（フランス語）、徳永恭子（ドイツ語）、中野徹（中国語）、原田信（中国語）、睦宗均（韓国語）
- 2 https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/pdf/dai3_1.pdf
- 3 国際学部は調査対象科目と同一の科目が開講されていないため、本調査においては調査対象外とした。
- 4 学部によりやや違いがあるものの、本学の第二外国語科目カリキュラムは以下の通りとなっている。

配当学年	科目名（それぞれ1 / Aは前期、2 / Bは後期開講。いずれも1単位）
1年次	〇〇語総合1・2
2年次	〇〇語総合3・4、〇〇語コミュニケーション1・2
3年次	〇〇語コミュニケーション3・4、〇〇語カルチャーセミナーA・B

イタリア語とスペイン語科目は、法学部と文芸学部のみ開講しているが、「カルチャーセミナーA・B」は開講されておらず、「コミュニケーション3・4」は文芸学部のみ開講されている。なお、調査実施時、イタリア語「コミュニケーション4」は不開講であった。

- 5 今回のアンケート調査には多くの方々にご協力をいただいた。この場を借りて心より御礼申し上げる。
- 6 竹田（2014：69）によると、2012年度日本の高校生が英語以外の「第二外国語」を学習しているのは1.5%のみと報告している。また、このような報告は、오대환（2010）にも見られる。
- 7 〈図2〉に示した6言語以外の言語を高校で学習した回答者は17名で、また39名が2ヶ国語以上学習したと回答した。

参考文献

- 泉水浩隆（2009）「日本（の大学）における第2外国語教育をめぐる現状と課題—スペイン語教育を中心に—」、『学苑』821、昭和女子大学近代文化研究所、pp.11-20
- 竹田宗継（2014）「経済のグローバル化と第二外国語習得の意義について」、『同志社商学』65-5、pp.533-547
- 中鉢恵一（2004）「外国語教育の衰退と英語帝国主義—大学における外国語教育の実態とその行方—」、『東洋大学人間科学総合研究所紀要』第2号、pp.71-80
- 堀茂樹（2005）「多言語主義について—英語以外の外国を〈も〉教える理由—」平高・古

石・山本（編）、『外国語教育のリ・デザイン：慶應 SFC の現場から』、pp.927

宮崎幸子（2014）「国際化・グローバル化社会における日本の外国語教育についての考察」、『日本英語英文学』第 24 号、pp.45-71

오대환（2010）「일본에서의 한국어교육의 문제점에 관한 이해」、『국어학』 57、pp.203-226